

「商賣は糸の間屋や。」

「同業でござすなア。……」

「……ばーんーとーう……。…」

「……へ、エ……。…」

「……お前と違ふかナ……。…」

「……さア……。…解りまへんで……。…」

「こらツ。馬鹿にすないツ。」

「あツ。そんな大きな聲で……。…」

「云ふたら何うしたんやいな。オイ、お前等に盲目にしられて何も知らん人間やと思ふてたらチイと當てが違ふで。」

「まア、どうぞ待つとくれやす。これは恐れ入りました。イヤもう今後貴方はんには頭が上りまへん。どんな御無理でも決して否やは申しまへん依て、どうぞ今の口は内々に。」

「心配しいナ。そんな事荒立てる様な野暮な人間なら極道もしやへんわいな。然しやなア。云ひ草は古いが魚心あれば水心や。良えか。……二時間だけ……。…」

「あ、そらいきまへん。」

「何、いかんツ。」

「あ、チョツ／＼／＼チョツと……。あゝア難儀やなア。そんなら此處を折れ合ふて斯うして戴けまへんか。今日は何時御寮人のお實家からお迎ひが見えるか解りまへん依て、出て貰ふと云ふ事は甚い困りますね。そこで貴方はんが、これから逢ひに往かうと云ふ藝妓はんを此處へお招びになつてだすなア。内でお遊びになつたらどうぞござす。」

「そんな無茶云ひないナ。假にも船場の堅氣の商人や。御近所の手前奉公人の手前、こんな處へ妓が呼べるかいナ。」

「いや夫れは心配おまへん。鳥渡手紙を一本お書きになつて若い者に持たして遣りますね。駕の垂れを深うおろして裏の浮世小路の方から遣入つて貰ふたら御近所へは滅多に解る氣遣ひ無し。又店の者はヒヨコ／＼お座敷の方は通らしまへん依て、少々は暑うおますやろが襖でも閉めてやつてなはつたら、解りは致しまへん。近所の小料理屋から出來合ひでもお取りになつて、コツソリと新猫でエ、私もお相伴をいたしますがナ。」

「ほんに左様なア。けども此暑いのに襖閉め切つて、内の者にまで隠れてピク／＼し乍ら酒飲んでゝもあんまり美味い事無からうと思ふがナ。そんなら斯うしようか。どうせ今晚中は親爺は留守や。でまア今日は店を早仕舞にするね。それから店の者一同へも御馳走して遣て、もウ家中皆一緒に成